

犬にみられる母子相互作用の考察

馬 場 一 雄 (日大小児科)
森 永 良 子 (伊豆通信病院
小児リハビリテーション科)
上 村 菊 朗 (")
佐 藤 能 成 (" 動物実験室)
岡 野 恒 也 (日本女子大)

はじめに

いつの時代にも子どもの問題は、母親の存在を無視して考えることは出来ない。この母子関係の重要性についての報告は多く、母子関係は、児童心理学・臨床心理学の古くて新しい課題といえる。

近年、思春期が社会問題となり、家庭内暴力、登校拒否、心因性食欲不振症、集団非行の背景にある幼児期の家庭環境に焦点があてられてきている。これらの原因に、

自我の確立の未発達が指摘され、幼児期の母子関係のあり方が論議されてきている。

母子関係の子どもに与える影響がいかに大きいかは、これらの症例や、ホスピタリズムの症状を通して経験することが少くない。

われわれがその原因をレトロスペクティブに推定はしても、母子関係に関する実験を子どもでおこなうことは道義上許されるものではない。

動物をつかっての実験、あるいは観察による研究は、その意味でひとの行動を考察する上で有効である。

犬は「ひと」との生活の歴史が長く、身近かに観察出来る哺乳動物であり、「ひと」との信頼関係が成立すれば、出産時からの観察が可能である。

Scott, J.R. は、犬の実験の利点について①成長・発達の経過が短時日で観察出来る(1年で成犬となり、年2回の出産が可能である)。②「ひと」と同じく、犬は種類が多い犬としての共通の行動と特性がある点で、「ひと」とまた共通である。③身近かに観察出来る哺乳動物である。上記の三点をあげている。

犬の観察をおこなっている間に、犬の問題行動の発生を経験した。(第40回、日本動物心理学会発表)。犬は、情緒的な反応を、行動で示すなど、日頃、子どもで経験する、共通の行動が認められる。

著者らは、動物実験で、犬を観察する機会を得

たので、犬を用いての実験ならびに行動観察を試みた。

実験動物として用いられる犬の飼育には、普通個別ケージを使用するが、開放ケージにし、運動場を隣接した土地につくり、群として生活をさせた。

群として行動するようになった犬は、まもなく、集団をつくり、順位が出来るようになった。その中で、出産、育児がおこなわれ、何組かの母子が成立するようになった。

母子の関係は同一ではなく、多様な行動を示し、母子の在り方を考える手がかりとなった。

目 的

群の中での犬の母子関係を実験的に設定し、あるいは、偶然に生じた事柄を契機としておこった母子関係の在り方を観察し、「ひと」の母子関係と対比し検討する。

検討を試みる角度は、

① 隔離飼育による、母親の養育態度の在り方と、子犬のその後の発達経過の観察… Scott, J. P. は、犬のクリティカルピリオドを3週間～8週間としている。新生児期からつづく3週間を移行の時期(transition period)とし、この時期に生理学的な発達が完了する。

約3週間を過ぎると、母親からの分離がはじまり、社会適応の時期(period of socialization)に入る。(表1)

この3週間～8週間は、犬としての生活の基礎が確立する時期であり犬にとって母子関係の重要な期間と考えられる。

離乳が可能になった時期に隔離飼育をおこない、隔離飼育の時期と期間による影響を検討する。

② 母子分離の時期とその経過の観察… 「ひと」の母子分離の問題は、決して簡単にはおこなわれ

ていない。愛情の欠除あるいは、早期の分離についての問題は広く取上げられているが、母子分離のあり方、時期についての関心はあまり払われていないといつてよい。

情緒的に不安定な母親は、子どもの自立を阻み、自我の発達をゆがめる。また、病弱な子どもや、障害児をもった母親は、子どもに過保護となり、その養育態度を共生状態などと表現し批難されることが多い。

母子分離の自然の在り方を、よく、動物に見習うという表現で、「ひと」の分離の不自然さが問題とされる。母子分離は、時によると、愛情を注ぎ、共に生活することよりも母親にとって難かしい課題である。

動物は、一定のきまった時期に母子分離がおこなわれるのであろうか。一般に、次の出産までに、母子分離がおこなわれるといわれている。

方 法	
場所、動物舎	2 1m ² 開放ケージと個別ケージ、
運動場	6 4m ²
対象犬、ダルメシアン種	1 0頭 } 1 5～
雑種	7 〃 } 2 0頭

① 隔離飼育

a) ダルメシアン種 (5 5年度発表)

b) 雑種

② 母子分離

a) 健常犬ダルメシアン種の母子分離 (5 6年度発表)

b) 障害犬の母子分離 (5 6年度発表)

c) 子犬死亡による母犬の対応

結 果

① b) 雑種ブチ母子の隔離飼育とその後の子犬の発達状況…

雑種ブチは、妊娠前より、子犬(ダルメシアン種)に関心を示し、母性的な行動を示した。例えば、子犬の母犬が、個別ケージを離れると、ケージ内に侵入し、乳房を含くませたり、子犬を愛撫するなど、母犬と同じような接し方をしていた。子犬が成長し、運動場に出るようになると、取り残された子犬を口で喰わえ、安全な場所に運ぶ

など、時には、母犬以上の保護と愛情を示めず犬であった。

雑種ブチは、5 5年1 1月1 3日に初産、3才であった。3頭出産(♂1頭、♀2頭)、その後♂が死亡し、♀2頭となった。

出産直後より、子犬に対しての保護と防衛は強く、出産当日、ケージをのぞき込んだ、ダルメシアン種の順位1位のメスを攻撃し、組み伏せるなど、通常の2匹の関係では考えられない行動を示めた。子犬に対しての愛着は、他の母犬にはみられないこまやかさが認められた(写真1)。

生存した♀2頭は、体重・身長ほとんど差がなく成長していった。生後6週に、2頭のうち1頭を隔離飼育に出した。期間は4ヶ月であった。

母子ともにケージ内で生活した子犬ムクは、常に母子で行動した。個別ケージに5ヶ月まで2頭で生活したが、他の母子にみられるような、餌ではじまる、母子分離は、はっきりした形では認められなかった。むしろ、仲良く、2頭でわけあって食物を摂取していた。

運動場では、2頭でたわむれあい、上になり、下になりながら噛みあい追いかけてあひする姿があった。

群の中でも、子犬ムクは、ごく自然に入っていた。開放ケージは、5ヶ月から、母子で入ったが、特に、他の犬との間のトラブルもみられなかった。

群の中で順位の高い犬に対しては、腹部をみせ、順の姿勢を示すなど、力の強い犬から攻撃を上手にかわしているようにみられた(写真2)。

成長するに従って、餌の取りあいは、同レベルや、やや力の強い犬の間でおこなわれた。うなり声を発するなどの威嚇をおこないながら、順位を更新していくようにみられた。

また、自己より弱い犬や、小犬に対しての攻撃はまったくみられず、むしろ、無関心とみられるような、かかわりあひ方を示した。

母子関係は、ムクの出産まで、開放ケージ内で、体を寄せあって寝る、運動場でたわむれるなどがみられた。

一方、隔離飼育されたチビは、動物舎に入ると、群となっている犬達から総攻撃を受けた。母犬ブチは、隔離犬チビに、何等の関心も示めさず、群

の一頭として、攻撃に加わった。チビも、また、母犬ブチに対して、ムクの母犬に示めす、依存的な態度や、愛着は、みられず、群の一頭としての認知をしているにすぎないように観察された。

動物舎にもどってからの隔離犬チビは、群の中で、攻撃目標となり、餌を得ることも困難であった。時々、個別ケージに移し、保護を必要とした(写真3)。

開放ケージ内、運動場でも、群の一頭としての行動はなく、常に阻害され、攻撃され、泣き声をあげることが多かった。

その後、ケージ内での生活になれてくるに従って、他の犬の食べ残こした餌をあさり、他の犬が運動場に出たあとで、開放ケージの中に残るなどの行動がみられるようになった。

その後、群の中での病弱な犬や、出産で弱った母犬などに攻撃する姿がみられるようになった。その攻撃は残忍で、下腹部に喰いつく、噛み切るなど、繰り返えし、執拗に攻撃する姿をみかけるようになった。

隔離犬チビに攻撃目標とされた弱者の犬は、執拗な攻撃に精神的にも肉体的にも消耗し、一頭は、腹部を噛み破られて死亡した。その後チビからの攻撃から守るために、弱者の位置にある犬は個別ケージに移すようになった。

また、出産した、子犬に異常な関心を示めし、出産した母子のケージ内に侵入しようとする姿を見かけるようになった。その後3頭の子犬が食殺されるという事実があった(写真4)。

隔離犬チビが群の中に入るまで、直接の攻撃が原因で死亡に至る子犬を経験したことがなかった。隔離犬チビは、他の犬がまったくしなかった、群の中で出生した子犬を食殺するという残忍な行動をとるようになった。その後、現場を目撃し、小犬殺しの犯人がチビであることをつきとめた。以後、小犬を保護するために、ケージ内で特別の配慮を必要とするようになった。

チビは、以前のように群全体から攻撃されることはほとんどなくなったが、チビが自己より弱者をみると、あるいは、けんかに負けた犬をみつけると、す早く攻撃し、そのやり方は、他の犬にはみられない、時には死に至らせる残忍な行動を示めた。

同胞犬ムクは、チビにみられるような行動はま

ったく認められず、群の中で安定した位置を保ち、生後、1年目には出産した。

ムクの出産は、開放ケージの中で、初産であったが、いわゆる安産であった(その後個別ケージに移す、ムクは、出産しても、個別ケージに入れられるのを好まず、開放ケージにすきをみでは入っていた)。現在、ムクの子どもは、4カ月になったが、母子ともに群の中で自然に生活し、子犬も、成犬の中を往来し、かつてのムクのごとく成長している。

② c) 子犬死亡による母犬の対応…

ダルメシアン種の通称 クロは3才で妊娠し出産した。クロの母子関係は特記するものはなく、ごく普通の犬の母子関係で観察された。

母子分離も離乳とともに はじまり、乳房を求める子犬をうるさがったり、餌を欲しがると子犬を噛むなどの様子が4カ月になるとしばしばみられるようになった。

クロの子どもは1頭を残し、他は、あづけられたので、1頭の子どもと個別ケージに入っていた。

食事の時に、子犬を噛むので、子犬が食事を十分にとることが出来ない状態になってきたので、クロを開放ケージに移そうと計画していた時に、子犬が死亡した。原因は、クロに噛まれた傷から感染したものと推定したが解剖はおこなわなかった。

母犬として、無神経でもあり、淡白でもあるクロの反応をみるために、死亡した子犬をそのまま個別ケージ内に置いておいた。

クロは、死亡した小犬をだくなど、様子をみていたが、小犬の異常を感じたのか、ケージから外に出ようとしなくなった。小犬に体を寄せる、鼻をつけるなどしている間に、目の焦点があわなくなり、食事をとろうとしなくなった。

よびかけると、喜んで反応する犬が、かすかに尾を振る程度の反応しか示さなくなり、動きが少なくなってきた。

食事をまったくとらないまま、よだれで口のまわりをぬらし、手をさしのべると、あごのをせ動こうとしなくなった。

このような状態を示したまま、小犬死亡後3日目にクロは死亡した。

クロの死亡は、あまりに唐突であった。特に愛情豊かな母犬ではなかつただけに、その死は、何

が原因かとまどわされた。

解剖による結果は、感染症、炎症、腫瘍などを否定するものであった。

子犬は、死の前日、母犬の乳房を求めて、体を曲げるようにして哺乳する姿を観察している。クロは、拒否はなかったが、積極的な受容はしていなかったため、クロの母親としての態度は、予想し難いものであった。

考 察

犬の母子関係は、それぞれの母親と、受け手の子どもとの関係で多様な母子関係が成立することを知った。

① 隔離飼育の実験では、隔離の時期が長期にわたるほど、その後、犬の群の中での生活適応が困難になることを経験した。

長期にわたる隔離は、群の中での適応を困難にし、その犬は、攻撃の対象となり、群の中での落ちこぼれた存在をつくっていく。

落ちこぼれた犬は欲求不満→攻撃性の理論を裏づけるように、群に適応してくると、弱者に対する残忍な攻撃となってあらわれた。この攻撃性は、群の中で生きていくための、適応の方法とも考えられる。

隔離飼育をした中でも、長期にわたるほど、群の中での生活が困難になるといえる。

今後の隔離犬の妊娠・出産というステップにどのように対応するか、果して、正常な出産と、育児をおこなうことが出来るのか、を、次の課題として観察したいと計画している。

② 子犬の死を経験した母犬の死という、母犬の対応は、母子関係の観察の視点を反省させられる

経験であった。

クロは、いわゆる、母犬としては、淡白な、観察の角度を変えると、愛情の稀薄な母犬と評価する可能性があった。

死に至らせるきっかけとなった、子犬の死は、母犬にとって、子犬の存在の大きかったことを証明しているといえる。

行動の評価は、とかく、表面にあらわれた、評価しやすい角度でおこなわれる場合が多く、母子関係の真髄にふれるのは大変に難しい。犬の母性についても、母犬の死という事実をみて、はじめて、母犬のショックを知らされたのであり、死に至るまで予想は困難であった。

む す び

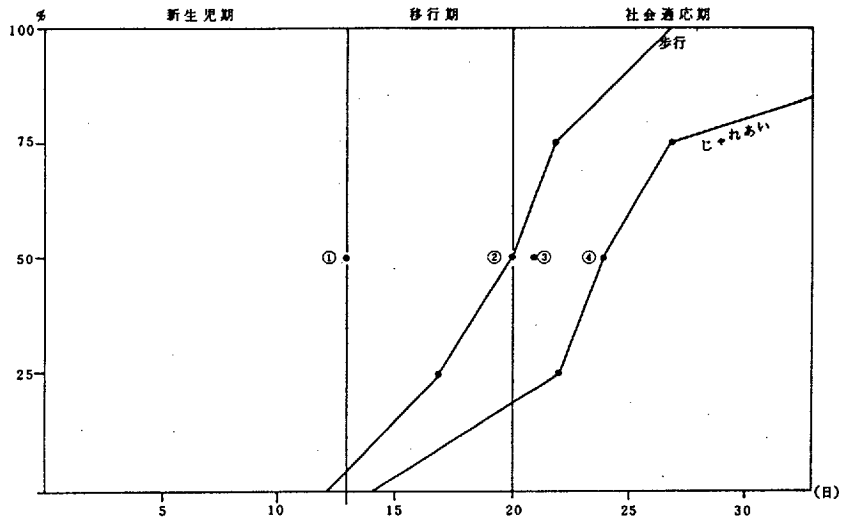
犬の母子関係を観察した結果、母の子にあたえる影響の大きいことおよび、母子関係が、その後の群の中で生活していくための、基本的な生活態度を決定する能力に影響する事実を知らされた。

母子関係は、子どもの状態によっても、母親の態度は変っていくものであり、障害をもつ子どもに対して、母の養護が厚くなるのは、動物の自然な姿であることを経験した。

また、母子関係は、外にあらわれた行動だけで安易に評価出来るものではなく、母親の子どもに対する愛情は、母親自身も、自己の愛情の重さを意識出来ない場合があるのではないかと反省させられた。

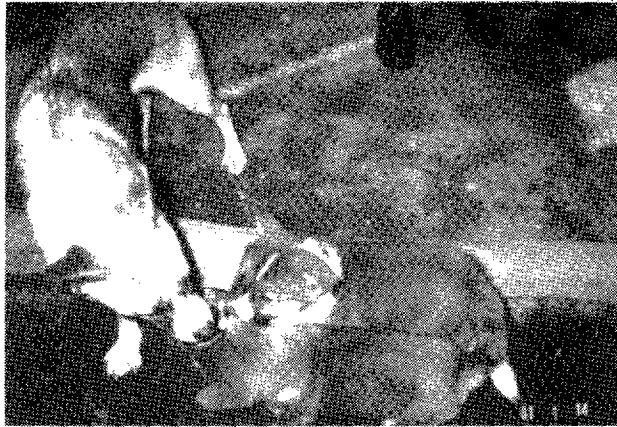
最後に、この研究に解剖など、御指導いただいた伊豆通信病院の二杉外科部長に感謝いたします。

子犬の発達 (表1)

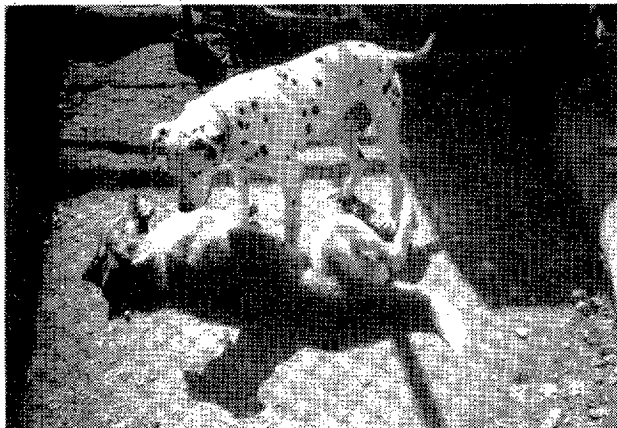


- ① 閉眼
 - ② 音の反応
 - ③ 乳歯
 - ④ じゃれあい
- ※ 50%出現率

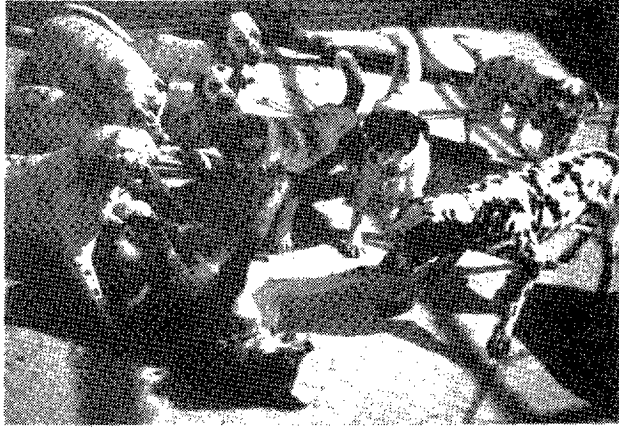
Scott, J. P. and Fuller, J. L.
(1965)



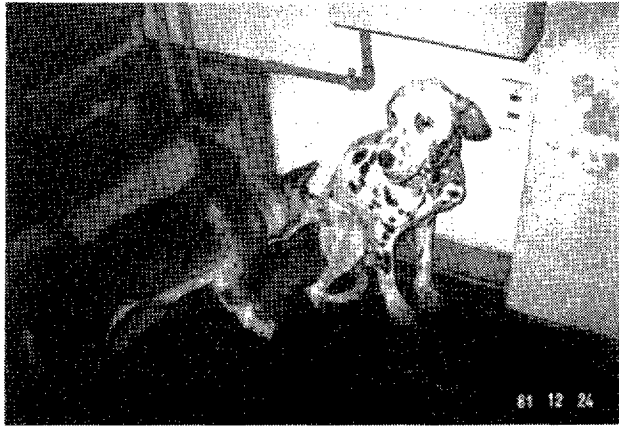
①



②



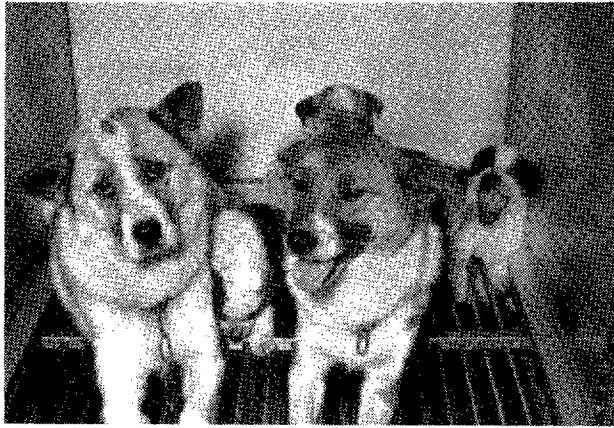
③



④



⑤



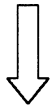
⑥



⑦



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



むすび

犬の母子関係を観察した結果,母の子にあたえる影響の大きいことおよび,母子関係が,その後の群の中で生活していくための,基本的な生活態度を決定する能力に影響する事実を知らされた。

母子関係は,子どもの状態によっても,母親の態度は変っていくものであり,障害をもつ子どもに対して,母の養護が厚くなるのは,動物の自然な姿であることを経験した。

また,母子関係は,外にあらわれた行動だけで安易に評価出来るものではなく,母親の子どもに対する愛情は,母親自身も,自己の愛情の重さを意識出来ない場合があるのではないかと反省させられた。